論　文

桑原武夫の思想形成
―― 幼年期から京都一中時代 ――

根津　朝彦†

はじめに

2001年から2002年にかけて今西錦司（1902～1992年）生誕100周年記念に関するシンポジウムや企画展示が行われた。しかし、その今西とも親しくし、京都大学人文科学研究所（以下、京大人文研とも略記）で中心人物となった桑原武夫（1904～1988年）の方は生誕100周年の企画が実施されたとは寡聞にして知らない[1]。桑原に関する回想や短評類は一定残されているが、桑原武夫そのものの研究は皆無といっていい[2]。京大人文研の学際的な共同研究の組織者であり、「戦後京都学派」（「新京都学派」とも称される）の中心軸にいた桑原は言及こそ多いものの、これまで研究の空白地帯であった。

戦後の京都大学において桑原ほど多彩な活躍を展開し、交際が広範囲に及んだ人物はそう多くはあるまい。そして桑原は京都の学者世界で人間形成を行ってきたゆえ、京都大学の歴史に関わりが深い人物であり、京都大学の歴史の一部分を逆照射する対象たりえる。彼は膨大な著作を残しているが、主なものは『桑原武夫全集』全7巻（朝日新聞社、1968～1969年、補巻は1972年）と『桑原武夫集』全10巻（岩波書店、1980～1981年）にまとめられている[3]。

本稿は初発の研究として、彼の自伝的著作を中心に、紙幅の関係で、桑原の京都一中時代までの思想形成を明らかにする。『桑原武夫集』全10巻に収められている自伝的著作で重要なのは「自己解説」（4巻207～215頁に所収、初出『現代随想全集』第20巻月報、創元社、1954年10月）、「大正五十年」（6巻298～323頁に所収、初出『文藝春秋』1962年2月）、「思い出すこと忘れえぬ人」（8巻2～188頁に所収、初出『文藝春秋』1969年1月～1969年6月、1970年1月～1970年6月）である。特にまとまった自伝である「思い出すこと忘れえぬ人」は、桑原が生まれてから三高に入学した夏休みまでを扱っており、本稿の対象期間を包括する最重要なテキストといえる。『桑原武夫集』に入っていないものでは、桑原武夫『人間素描』（文藝春秋新社、1965年）所収の「私の歩いた道」（ABC放送「一週間自叙伝」1964年1月6日～1月11日）も自伝的著作である。

次に桑原武夫の父親桑原隲蔵に関しては「おやじ」（6巻所収、初出『朝日ジャーナル』1964年4月5日）、「桑原隲蔵小伝」（7巻所収、初出『我等の郷土と人物』1952年5月に『桑原隲蔵全集』第5巻で増補したもの、岩波書店、1968年10月）[4]、桑原の故郷である敦賀については「ふるさとを行く」（7巻所収、初出『週刊朝日』1966年8月12日）、「私の敦賀」（9巻所収、初出『敦賀市だより』1977年3月）がある[5]。また書物の影響を探る上では「『三国志』のために」（1巻所収、初出『文芸』

†国立歴史民俗博物館機関研究員

1942年８月)、「私の読書遍歴」(３巻所収、初出『日本読書新聞』1951年５月23日)、「幼いころの絵本」(４巻所収、初出『日本読書新聞』1956年８月20日)があり、京都一中の校風を伝える「森外三郎先生のこと」(４巻所収、初出『文藝春秋』1956年12月)も参考になる。

桑原武夫の経歴についてはよく知られていようが、学歴を中心に最低限度のことを述べておく。1904年５月10日生まれ。1911年４月に京都市立第一錦林小学校に入学し、1917年３月に同校を卒業。同年４月に京都府立第一中学校に入学し、在学中１年間の休学を挟み、1922年３月に同校を４年修了。同年４月に第三高等学校文科丙類に入学し、1925年３月に同校を卒業。同年４月に京都帝国大学文学部文学科（フランス文学専攻）に入学し、1928年３月に同大学を卒業（本稿では、それぞれ錦林小学校、京都一中、三高、京大、京都帝大とも略記する)。以降、大谷大学予科教授、大阪高等学校教授、東北帝国大学法文学部助教授などを歴任し、1948年11月から1968年３月まで京都大学人文科学研究所教授を務めた。戦前はスタンダール、アランを紹介し、戦後は「第二芸術」や『文学入門』など啓蒙的著作で知られる一方、京大人文研で『ルソー研究』、『フランス百科全書の研究』、『フランス革命の研究』、『ブルジョワ革命の比較研究』、『中江兆民の研究』、『文学理論の研究』、『ルソー論集』の共同研究を牽引したことは周知の通りである。1988年４月10日に没するまで多方面の著作を残した。

この巨人たる桑原武夫に迫っていくために、蟷螂の斧の試みではあるが、まずは彼の幼年期、錦林小学校時代、京都一中時代の諸相を順次検討する。

1　幼年期

1－1　桑原家と打它家

桑原武夫（1904～1988年）は1987年に敦賀市名誉市民となる。京都育ちの桑原にとって敦賀は唯一の故郷である。それは桑原が敦賀生まれであり、幼年期をそこですごし、また彼の両親ともに敦賀の出身であったからである。1933年に桑原と結婚する田中田鶴の両親も敦賀の出身であった（７巻179頁）[6]。

まず武夫にとって父方の桑原家から見ていく。桑原家の祖先は、朝倉義景の家臣で、義景が滅びてから敦賀の御手洗に住み、代々製糸業を営んでいた（８巻思６頁)。製紙業は鳥の子屋（８巻「思い出すこと忘れえぬ人」では鳥ノ子屋と表記）と称し、上質和紙をつくり、主に京都西陣の金糸業者に資料を納めていた。武夫の祖父、桑原久兵衛には女の子数人の子どもがあったが、みな早世して、男の子である喇(せい)一郎（1865～1931年)、隲蔵(じつぞう)（1871～1931年)、勣(えい)三郎の３人が育った（８巻思75、83頁)。久兵衛は漢学を好み、衒学的なところがあり、子どもに難解な名をつけ得意になっていたという（７巻435頁、８巻思７～８頁）[7]。

次男の隲蔵（武夫の父）がまだ幼い1873年、武夫の祖母やえが亡くなる（８巻思８頁では「名は不確実」とある)。久兵衛には妾もいたようだが、1901年９月７日に久兵衛は中風で世を去った（８巻思６、８頁)。つまり武夫は父方の祖父母と出会うことはなかったのである。

一方、武夫の母方の打它家は敦賀で格式だけは最高とされていた（８巻思15頁)。歴史を遡れば初代打它宗貞（1559～1643年）は飛騨の鉱山奉行で財を蓄えて敦賀に移住した。２代目の打它公軌は文化人のパトロンとして財産を消費して家を継がず京都に住んだが、敦賀の打它家は江戸時代、町人頭を務め、打它屋敷の表門は大谷吉継の敦賀城の城門をもらって移したものであった（７巻179～180頁)。

しかし打它家は明治以降は没落過程にあり、武夫の祖父打它弁次郎は地代以外何一つ収入がなかったとも記されている（８巻思15頁)。打它弁次郎は敦賀で町制が敷かれてから初代と３代目の町長

を務めている（8巻思22頁）[8]。武夫の母の姉きよ（結婚後みえ）は小浜の古河家の者と結婚する。分家にあたる古河力作は1910年の大逆事件で処刑され、事件発覚後、祖父の弁次郎は1ヵ月門外に出なかったようだ（8巻思23頁）。母方の祖母の記述はそう多くあるわけではないが、武夫は時々迷信を聞かされたという（3巻449頁）。

1－2　父隠蔵と家族親類

桑原武夫は両親と親類から小さい頃より愛されて育ったといっていい。特に桑原が学者として人生を歩む上で大きかったのは父隠蔵の存在である。桑原隠蔵は長らく京都帝国大学文学部教授を務め、東洋史学の創設者の一人として知られる。武夫によると、父隠蔵は明治維新以後、官僚職階制的にいえば敦賀で一番出世した人物であった（8巻思18頁）。父親が京都帝国大学の教授であったことから、武夫は小さい頃から内藤湖南をはじめ父の同僚の話を耳にし、やがて父親の同僚から目をかけてもらうことにもなる。

隠蔵は、宗教を信じず、生前家に仏壇を置かず、死の1～2年前に妻にせがまれるまで神棚も設置せず（1巻426頁）、武夫は父のことを「楽天的な科学的実証主義に立っていた」と表現している（6巻558頁）。武夫は少年の頃に青写真を買った釣銭を余計にもらったことを友人に誇示した時に父より厳しい叱責を受けてから長らく厳しい言葉を聞いたことがなく、父から一度も殴られたことがないと述べている（6巻560頁）。また父の死後、父の日記を見ていかに自身が父の深い慈愛の内にあったかを一層知ることになり、その感動を隠さず綴っている[9]。

打它弁次郎の次女であり[10]、武夫の母である桑原（旧姓打它）しん（1885～1946年）は（4巻207頁）、1903年10月26日に桑原隠蔵との結婚届けを出している。武夫は、実際に両親が結婚したのは1902年冬であると推測している（8巻思3、9頁）。父隠蔵と比べて、武夫の母に関する回想は少ない。ただ、母は小学校しか出ていないものの「学力優秀、容姿端麗」（7巻440頁）、「母を最高の美人だと思い込んでいた」（8巻思11頁）、「私はいつも母を愛していたのだが」（6巻557頁）といった桑原による記述を見ると、親子の関係は良好であったと考えられる。

武夫の兄弟姉妹は妹1人だけである。妹瑞枝の詳しい記述は少ないが、1910年1月生まれで、武夫より6歳下で（8巻思182頁）、彼が大学生の時に、高等女学校に通っており（6巻554頁）、1932年8月5日に若くして亡くなったようだ[11]。

ここで欠くことができないのは、父方母方の伯父叔父の存在である（以下、列記する場合は「おじ」と記す）。桑原はかれらに強く影響を受けたと語っており、興味深いのはその中で父隠蔵以外に誰一人として社会的に出世を遂げた人物がいないことである。父の兄弟は勉強嫌いであるが陽気で楽天的、母の弟たちは勉強はできたが弱々しく日陰的であったと桑原はいう（8巻思70～71頁）。武夫が生まれて間もなく長いこと接し、また観察してきた対象のおじたちの対照的な性格と、世に浮かばれない生き方をしてきたことは、佐々木康之がいうように桑原に幅広い人間理解と包容力を培ったと思われる[12]。

父方のおじは2人おり、母方の叔父は4人いた。父隠蔵が武夫の命令者ないし指導者であったのに対して、おじたちは愛護者・庇護者であったといい、両家で唯一、社会的な地位を占めた父隠蔵の長男として家族集団で中心に近いところにいたような気がすると桑原は述懐している（8巻思67頁）。

桑原久兵衛の長男で、隠蔵の兄である喇一郎は、久兵衛が死んでから製紙業の鳥の子屋を36歳で相続する。相続する少し前から町会議員をし、相続の2年後に御手洗地区の区長になり、同志と敦賀屋商会という日露貿易の会社を起業するも大失敗して、小間物屋を開くも京都と大阪へ行くたびに

京都の先斗町で飲むような生活をして、商売の回収不良と放蕩で家業を潰してしまう。武夫も小学生１～２年の頃、喇一郎を見て「田紳」(田舎紳士)の雰囲気を感じて気恥ずかしかった思い出を述べている。武夫は、鳥の子屋の没落を1913年冬から1914年春と推測している（８巻思75～78頁)。久兵衛が1901年に死んだ後、２～３年で破産にまで突き進んだという記述もあり（７巻180頁)、これは敦賀屋商会の失敗を指すのかもしれない[13]。喇一郎は敦賀の「東遊郭」でも散財し（８巻思78頁)、大連に渡り、その後、故郷の敦賀に帰り町役場の衛生係を務めた。兄の失敗の尻拭いをさせられたのは隲蔵である。武夫はかつて町会議員や区長でいばって出入りした伯父が、同じ建物で吏員に使われる衛生係に転じてもこだわりなく生きたことに真性の楽天的な気質を認めている（８巻思71、78～83頁)。

隲蔵の弟の勘三郎は、京都の喜多山という時計店で修業し、敦賀で時計修理屋をしていた。武夫たちは「時計屋のおじさん」と呼んだ。大の釣り好きで、かば焼きの名人でもあった。経済的に豊かではなかったものの、「芸妓は食べられんやないか」という言葉を放ち、食欲に重きを置いたようだ。日露戦争にも出征している（８巻思71～74頁)。敦賀は古くから京都文化の出城で、町の衆はそれを誇りにしているという桑原の記述があるが（７巻188頁)、喇一郎、隲蔵、勘三郎の３兄弟も揃って京都に何かしらの縁があったとわかる。

他方、母方の１番目の叔父宗次は、京都一中、三高、京大法学部を卒業し、京都商業会議所に勤めるものの、やがて敦賀の市会議員を任期に満たないで辞任するなどして郷里に引っ込んでしまう（８巻思68頁)[14]。２番目の叔父は、東京蔵前の高等工業学校を出て製紙技師として江別の王子製紙の上席技師、樺太の製紙工場、敗戦引揚げ後は大分県の小工場で一生を終えた。彼の唯一の趣味は帝国海軍の艦艇全ての絵葉書の収集で、ある日そのコレクション全てを武夫に譲り渡したという（８巻思63～64、68、163頁)。３番目の叔父は、武夫より２つ年上にすぎず、武夫も中学時代まではよく交わった。小学校の時は成績優秀だったが、京都一中は不合格となる。私立中学に入り成績上位を占めるものの国立の高等学校の受験には何度も失敗して、強度のノイローゼとなり、それから回復しても一生無為の人として送ったと述べられている（８巻思68～69頁)。４番目の叔父に関する回想はないようである。

先に言及したように桑原が母方の叔父を「すべて旧家の末裔らしく優秀だが、どこか弱々しく、いつも日陰へまわろうとするつる草のような感じをあたえる」と評した通りであろう（８巻思70頁)。鳥の子屋を父の兄が破産させてしまい、打它家の方も没落過程をたどる途上、学者として名を成す隲蔵の息子として武夫は、バラエティのあるおじたちに見守られながら京都と敦賀で幼年期をすごしていくことになる。

１－３　絵本と合戦ごっこ

それでは桑原武夫の幼年期を具体的に見ていくことにする。父隲蔵と母しんの長男として桑原武夫は1904年５月10日に福井県敦賀市蓬莱201の母の実家で生まれる。いうまでもなく日露戦争が勃発した年である。武夫はそのまま母の生家の敦賀ですごし、東京高等師範学校教授であった父隲蔵のいる東京へ、母、女中とともに合流するのは同年10月20日である（８巻思10頁)。桑原は東京時代の記憶は全くないといい（４巻207頁)、1907年春まで東京に住む（９巻501頁)。同年、父隲蔵の清国留学にともない武夫は父の帰国まで敦賀で暮らすことになる。桑原によれば記憶は敦賀の時代から始まると述べている。1909年父が留学から帰り、京都帝国大学教授に着任すると、京都に移り岡崎の東福ノ川町に約３年間住んだ（８

巻思36頁)。この東福ノ川町に住んでいた頃には、父に届く西洋からの絵葉書は武夫のものになり、何十枚かをまとめた絵葉書帳を所有していた(8巻思51～52頁)。

桑原の幼年期においてまず知的世界の窓口になったのは絵本と、父が聞かせてくれた就寝前のお話である。小学校入学前後の時期を確定するのは難しいが、桑原によると小学校入学の少し前に戦記ものめいた絵本を読み出したという。『家庭教育・絵入読本・日本歴史』を4巻までと、他には『ほまれの武士』『仇討物語』『太閤秀吉』『忠臣蔵』『南朝十二忠臣』『加藤清正』などである。これらは概ね発行が1909年で、小学校に入学する前に買い、総ルビによって何とか読みこなしていたはずと述べている。こうした絵本によって以降、講談や戦記ものを読み漁る方向に誘われたと桑原は振り返っている(4巻539頁)。同時に桑原は思想史の研究に際して絵本の研究という観点を提起しており、自己の影響としては偏狭な軍国主義ではないものの忠君愛国思想を底にもつ富国強兵のイデオロギーを絵本から付与されたと省察している(4巻541頁、8巻思32頁)。

これも小学校入学の前後の頃のようだが、母の言いつけで書見中の父に就寝前の挨拶を武夫がすると、必ず父は一緒に床に行き、戦物語や、武夫が主人公となる即興冒険談といったお話を聞かせてくれたという[15]。その時に父が話してくれたのは後述するように武夫が人生で最も繰返し読むことになる『通俗三国志』の内容であった。

そうした父からの話に武夫が物足りなくなった頃、隲蔵が発明したのが「合戦ごっこ」である。自分の好きな英雄や豪傑を5人ずつ家来にしてお互いに挙げて競うゲームである。武夫が弁慶を出すと、父は義経を出し、孔明や楠正成の名を挙げれば、エジソンやマルコーニといった近代科学者に押さえられるといった具合に、知らず知らずのうちに歴史上の人物や事物に詳しくなっていた(6巻555頁)[16]。小学校に上がる前、戦記ものの好きな叔父(勤三郎と推定)が日本で一番力が強い者や金持ちを武夫に紹介すると、一番力が弱い者や貧乏な人は誰なのかと武夫は聞き返し、「この子はさすが学者の子で、理屈が上手じゃ」などといわれたという(8巻思67頁)。

2 錦林小学校時代

2－1 『通俗三国志』から読書生活へ

このような活字色の薄い絵本やお話から、自然に読書へと進んでいく。武夫の知的欲求に対処するため、小学校に入学する前後、父は彼を連れて寺町の竹苞楼に行き、同益出版社の明治15年版の湖南文山訳『通俗三国志』を買い与えた[17]。ただし全50巻のうち隲蔵が購入したのは赤壁の戦までを扱った最初の20巻分である。以来、桑原はこの『通俗三国志』を1942年の時点で20回以上も読んだという(1巻521～522頁)。赤壁の戦のところまでは小学2～3年生の頃には読み上げていたといい(9巻292頁)、桑原にとって愛読書となるこの『通俗三国志』は例えば小学5年生の1916年1月23日から27日までの5日間で再び赤壁の戦までを読破している(8巻思64～65頁)。晋の一統まで読み通したのは中学入学後と述べている(1巻522頁)。

無数の個性的な人間が活躍する『通俗三国志』の世界を桑原が潜り抜けたことで、彼の人間への旺盛な好奇心と、歴史についての関心が深まったことは疑いえない。そしてこのように読書に耽ることができたのは、桑原がいうように隲蔵を父としたがゆえの「書巻の気」の中で育ったことが大きい。夏になると父の本の虫干しをさせられた覚えがあるといい、桑原によると当時京都帝大で最も蔵書数を有していたのは隲蔵であったと述べている[18]。また父隲蔵の部屋にはランケの大きな肖像がいつも掲げられていたという(1巻241頁)[19]。にもかかわらず『通俗三国志』の入口をもちなが

ら桑原が中国学の勉強に一生を捧げることにならなかったのは、同時に小学生の頃から父に食卓で「シナ人の保守文弱性、その食人食の悪習、その腐敗政治」を聞かされたことが一要因であったようである（7巻355頁）。

桑原は1911年京都市立第一錦林小学校に入学する。小学生のいつの時期なのかはわからないことが多いが、小学校から帰るとカバンを投げ出して、近所の「岡崎の府立図書館の子供室」に通い[20]、巌谷小波『世界お伽噺』100冊のほとんどを読み、押川春浪や三津木春影の冒険小説も読んでいた（3巻216頁、6巻大303頁）。少年雑誌もグループで相互に貸し借りして、『日本少年』『少年倶楽部』『新少年』など当時出ていた少年雑誌はほぼ全部毎号読破したという。桑原がとっていたのは『飛行少年』（1915年1月に創刊）で、第一次世界大戦で日本が参戦して青島を陥落させ軍国的気風が高揚する中に自身もいたことを示しているという。1916年に彼はアメリカの飛行家が宙返り飛行を実演するのを兵庫の鳴尾に2回も見学に行っており、「一種の海軍びいき」があったと回想している。同じ1916年には父の書庫から『海外新話』も手にとっている（8巻思62～63、65頁）。中学に進学するまでに桑原自身、相当の読書家を自任するほどになっていた（6巻大303頁）。

2－2　小学校での日々

読書面で叙述が先行したが、ここで桑原の小学校生活をまず時系列順に追っていく。前述したように1911年4月に錦林小学校に入学する。入学当初は1ヵ月近く毎日学校でいじめにあい泣かされたらしい。それまで甘やかされすぎたので強烈な劣等感を抱かされるが、勉強はよくできたので先生に認められ、やんちゃで大胆な行動からそのうちクラスの人気を集めるようになる。入学写真によると男子のクラスは47人であった。入学して最初の日、担任が日章旗を5本描き、その数を生徒に問うて、桑原は4本と答えて叔父を恥ずかしがらせた。担任の影になって1本見えなかったそうである（8巻思39、41、43頁）。

1912年4月には付近の岡崎入江町5番地に移り住む。錦林小学校の隣である。1923年に塔ノ段へ引っ越すまで10年ほど住むことになる（8巻思36頁）。1912年は明治から大正になった時期でもあり、9月には乃木希典の自刃があった。これに桑原は感動した記憶がないのは、乃木の殉死を批判した谷本富が京都帝大で父隲蔵と同僚であり、隲蔵は谷本の意見を支持したわけではないにせよ、谷本の子どもまで迫害されて通学もできぬことを嘆いていたので、その間接的な影響が桑原にもあったようだ（6巻大302頁）。

小学2年生のとき桑原は新入生への歓迎の辞を述べて好評を博した（8巻思104頁）。同じく2年生の3学期には京都市内の小学生を対象とする作文コンクールのようなもので錦林小学校を代表して桑原の作文「去年の正月と今年の正月」が提出される（8巻思65～66頁）。先述したように桑原家の鳥の子屋が没落したのはその間もない1913年冬から1914年冬の頃であった。同じ時期、桑原は夜店の演歌師のファンであり、添田啞蟬坊の「まっくろけ節」や、1914年の「カチューシャの唄」を覚えて歌ったところ叱られたのが小学校の教師に叱責された最初の経験であると述懐している（6巻大313頁）。

これは桑原が小学4年生以降のことであろうが、内藤湖南の息子である内藤耕次郎が錦林小学校から京都一中に首席で入学した。耕次郎は桑原より3年級上の生徒で、これに感激した錦林小学校の校長は朝礼の訓話でよく彼の名前に触れて在校生を激励したらしい。桑原に内藤湖南の名を強く印象づけたのはそれが初めてであったという（1巻129頁）。

錦林小学校は児童数が最も多く、スポーツが強く、勉学も盛んで京都一中への進学率は最高だったよ

うで、京都一中入学後も「錦林閥」[21]といわれるような幅をきかせたようだ[22]。この要因を桑原は錦林小学校の男女別学の点に見出している。彼によると、錦林小学校は新興の気風にあふれているものの、反面それは成り上がり性を含んでおり、その校風を敬遠した「典雅な文化主義者たち」は子弟を鴨川を渡った銅駝小学校などに通わせたという（8巻思39～40頁)。

1915年の秋頃、京都一中の運動会に来賓として招かれた父隲蔵に武夫は同行した。マラソンで父と一等の当て合いをすることになり、武夫が一等と予想して戻ってきたランナーが後に親交を深める今西錦司であり、今西の名を初めて認めることになる（7巻193頁)。その父は同年11月10日、大正天皇の即位の礼で、京都帝大の文学部から選ばれて上田敏とともに参列した。これを武夫は名誉と感じ、父の新調の金モールの大礼服が美しかったことを回想している。彼は奉祝行事で仮装した市民の踊りの行列を毎晩見に行ったそうだ（6巻大302頁、7巻223頁)。

桑原は少なくとも1916年からは日記をつけ出し、その頃の記録として毎日必ず誰か友人と遊んでおり、いつしかクラスの中心人物になっていたという。1916～1917年の日記帳に社会事象が出て来るのは1917年3月16日の京都一中の入学試験の直前にただ1行「露西亜が革命で騒いでいるそうだ」という記述のみであった。当時、上述した少年雑誌に時折投書して、2～3回賞をもらったことがあるそうで、得意としたのは冠づけや笑話といったジャンルで、中学時代の回覧雑誌『近衛』で見せるユーモア作家の片鱗をのぞかせていた（8巻思60、65頁)。

桑原が小学校時代で記憶が鮮明なのは担任の教員たちである。1年の担任は畠中喜多男で、ユーモアがあり桑原は私たちは一度も叱られたことがないと述べている。2年から3年の1学期までの担任は岡村豊作で、彼は桑原家の女中の井関はなと恋愛関係になり結婚して別の小学校に転じることになる。2学期から担任になったのは深津仙吉で、最初は厳しくされたが席次は1番をすべらず仲良しになったと桑原は書いている（8巻思42～50頁)。

おそらく深津が4年までの担任で、5～6年の担任は当時教頭をも務めた小島兵吉である。彼は小島塾も開いており、クラスで常に首席であった難波捷吾に誘われたことがきっかけかもしれないと桑原は書いているが、小島塾に6年生から通う。もともと桑原は算数を得意としていたが小島塾に通い出してから数学の力が躍進したと述べている。1916年12月から京都一中の受験のため国語の勉強で別の塾にも通った。おそらくこの6年生の頃、読書家を自任していた桑原は、難波の「はらませている」という表現を知らずに、自尊心を揺さぶられている。総じて小学校時代の教師は善良な人で、桑原も成績が良かったこともあり愛されたと回想している（8巻思52～55、85、131～132頁)。

桑原の幼少期での日々は京都が中心ではあったが、小学校入学後も中学の初年級まで夏休みは毎年敦賀の祖父母のもとですごしていることも見逃せない（9巻501頁）[23]。敦賀の山の手にあたる地域に存する打它家に常駐し、時折下町にある桑原の実家に寄ったという（8巻思33頁)。打它屋敷は700坪を超える広壮な敷地で、居宅自体は65坪であった（9巻502頁)。これも正確な時期はわからないが、小学校の夏休みには毎晩敦賀の天満宮の大好きな夜店に足を向け、兄の伯父も夜店が好きだったという（8巻思81頁)。また天満宮そばの「東遊郭」にあった敦賀最初の西洋料理店である磯貝で父に初めてアイスクリームを食べさせてもらい、西洋心酔の素地をつくったという回想もある（7巻182頁、9巻503頁）[24]。

多感な年頃であるから、様々なことに興味をもつのはむしろ当然かもしれないが、桑原は映画も情熱的に好きであり、毎週でも行きたかったが父

との間で月１回という約束があり、前借する形で、新京極の南電気館、北電気館、オペラ館、第二京極の八千代館らの映画館に通ったそうだ（３巻473～474頁、８巻思60～61頁）[25]。新京極では、小学生の頃、大阪のにわか（即興笑劇）がかかることがあり、母に頼んで数回見たことがあるとも書いている（７巻231頁、８巻思150頁）。

さらに日本映画界の先駆者の一人日活の横田永之助が桑原の家から近くにあり、横田の息子が桑原の同級生であったことから、映画に一層親近感を抱いたと述べている（６巻大312頁）。桑原は最初は尾上松之助の時代物ファンであり、近所の南禅寺や永観堂で「目玉の松ちゃん」こと尾上がロケするのを追っかけ歩いたとも書いている（３巻473頁）。

桑原は、小学生の頃から吉田山や将軍塚で兵隊ごっこに熱心な兵隊好きでもあった（６巻大303頁）。小学校時代の友人や在校生の人名はあまり見られないが、吉田山にある友人宅に何度か遊びに行った際、その隣家が林達夫の家であり、林達夫の弟である林三郎（後に軍人）は桑原の小学校から中学２年までの同級生で、林達夫にも多分会っていたはずと記している（８巻思94頁、８巻337～338頁）。京都帝大の社会学者であった米田庄太郎の息子である米田敏男とも桑原は小学校から中学校まで同級であったようだ（２巻575頁、８巻思91頁）。

小学校時代の桑原も自身の恵まれた環境をいかし、読書を通じて知的好奇心を深めながら、社交的で、おおよそ逆境とは無縁で、順境の傘の下にあったというべきである。

３　京都一中時代

３－１　友人との出会いと静思館

桑原は難関といわれた京都府立第一中学校に1917年４月に入学する（1918年に京都府立京都第一中学校に改称）。この年の入学志願者は438人で、入学許可者は138人であり、倍率は約3.2倍であった[26]。小学校時代に難波捷吾（後に国際電信電話重役）とは同級生であったが、京都一中時代から生涯に渡る大勢の友人との出会いが始まる。

桑原の在学時の京都一中は、イギリス留学等の経験をもつ森外三郎が校長を務め、自由主義的な校風が波及した期間であった。桑原の入学式の式辞で森校長は「諸君を呼びすてにはしないで、一々何々君という方針である」と述べたという（４巻543頁）。級長は選挙制であったが、入学時の級長は入試の成績順で、甲組は難波捷吾、乙組は桑原武夫、丙組は島本融（後に北海道銀行頭取）で、この３者はともにグループ活動をしていくことになる（８巻思103、107頁）。これは象徴的な一こまであるが、エリート校の京都一中の中でも秀才同士で桑原は交友関係を育むことになる。

桑原と同年同月生まれの貝塚（当時は小川姓）茂樹も同じ年に京都一中に入学した[27]。桑原とは後の京大人文研でも無二の同僚になるが、貝塚は、難波捷吾の紹介で桑原と知り合ったという。難波捷吾は京大工学部教授難波正の息子であり、貝塚と桑原ともに親しくしていた同級生の大幸甫は京大理学部教授の大幸勇吉の息子、大塚完は京大工学部教授の大塚要の息子であった[28]。

しかし、桑原は入学してほぼ１学期は多少のコンプレックスを抱くことになる。錦林小学校は桑原が入学した年も京都一中に16人の入学者を送りこみ、３クラスの級長では難波と桑原が２クラスを占め、反感をもたれていたのかもしれないと桑原は回想する。1917年６月の全校雄弁大会に際してクラスで立候補者が出なかったため投票したところクラス人数よりも多くの票が桑原に集まり、それを承諾するものの、いたずらと若干の悪意を感じたと述べている（８巻思103～104頁）。

とはいえ、桑原は好奇心をもって中学入学前からミルクホールに同級生と顔を出したこともあり、

成績のわるい学生や不良とも仲よくしており、様々な友人から頼りにされる面もあって、中学1年の夏休み前頃にはクラスの中心人物になっていた（6巻大312頁、8巻思86～88、99、107頁)。

中学1年では数学教員の渡辺義勝を桑原は慕った。京都一中の算術の問題で、桑原はある問題の誤りを指摘した上で解答を記した。桑原の入学後、その問題を作成した渡辺は、誤りを指摘したのは桑原と生徒に紹介して彼のことを激賞した。桑原は渡辺に教えを受けた最後の生徒であったが、渡辺のことが好きで数学は毎学期満点であった（8巻思120～127頁)。数学の学科はクラスの首席であり、桑原は中学1～2年の頃までは漠然と数学を将来の専攻科目にしようと考えていた（3巻218頁、詩人13頁)。

桑原は京都一中に入ってさらに読書欲を旺盛に有するようになる（8巻思88頁)。それは京都一中の図書館静思館（1913年1月に開館）と、読書家の友人の存在が大きい。

桑原は入学早々、静思館の委員にされた。管理は生徒委員の自治に委ねられ、少ない予算ながら購入図書の選定や貸出なども生徒に任されていた。組長である難波、桑原、島本もともに静思館の委員を務めていたようだ[29]。桑原は1週1回6時頃まで居残り、本に親しむ機会も増え、濫読の癖を強めたという。貝塚も中学2年になってからか、静思館の委員になったようで「同じ二年生の島本融君と知り合うようになった」と書いている。昼休みと放課後に静思館は開館され、この静思館に熱心だった上級生委員の下村寅太郎から貝塚は「志を立てて館の本を読破せねばならぬ」と檄を飛ばされたようだし[30]、桑原の方は掃除を怠けて下村から度々怒られたと記している（1巻129頁、3巻218頁、4巻544頁)。

そもそも静思館は内藤湖南の命名によるものだが、内藤湖南の息子がこの静思館の委員になって学校の成績が下がったことから、同僚の隲蔵を通じて桑原のことを心配して監督するよう求めたということで、桑原は内藤に対して当初「ひとのうちの子供の読書にまで干渉するとは、何と嫌な爺だろう」と反発したが、人の噂や父の雑談などから湖南への印象を改めるようになる（1巻130頁)。

桑原は小学校時代の多読から読書には自信をもっていたが、先に言及した貝塚茂樹と島本融に中学で出会い目を開かされる。貝塚は中学1年で近松門左衛門の心中物に目を通していて、桑原は圧倒された（4巻469頁)。桑原は『水滸伝』『西遊記』も小川家の有朋堂文庫を借りて読んだと思うと述べている（8巻思134頁)。もう一人の島本の方も中学2年でマルクスを論じるなど多方面の読書に通暁していて（3巻219頁)、桑原はかれらの存在に刺激を受け、夏目漱石、永井荷風、谷崎潤一郎などの「高級文学」を熱心に読み進めることになる（6巻大303頁、詩人13頁)。

桑原が様々なところで書いているように彼は永井と谷崎の作品に通底する西洋への憧憬を潜り抜けたことで、フランス語を学ぼうとする大きな契機になった（3巻218頁、1巻跋626頁)。永井と谷崎どちらを先に読んだのかは定かではないが、いずれも中学2年生の時に読み始めたようである。谷崎潤一郎で最初に読んだ作品は『中外』に載った「小さな王国」で、1918年8月25日の彼の日記に面白かったと記されているらしい（8巻思102頁)。実は父隲蔵も、他人にその趣味はもらしていないようであるが、谷崎の愛読者であり（1巻208頁、7巻440頁)、父の書架にあったために桑原の接触が容易になったことは確かであろう。

永井荷風に関しては何から読んだかは記憶にないとしながらも、友人の難波捷吾の兄から春陽堂版の全集本を借りて読んだのが中学2年生の頃であり、「一目ぼれしてしまった」と記している。これは後年の位置づけであるが、桑原は、西欧に対する深い愛着と、中国文化に対する造詣において谷崎よりも荷風を高く評価している（8巻思

141～142、145～146頁)。

また中学1年の時に、父の同僚であった矢野仁一から武夫宛にアメリカより絵葉書が届いた。これは自分に送られた初めての外国郵便で非常にうれしかったと述べている（8巻200頁)。もとより人間への影響は多層的な蓄積によるものであり、厳密な考証は不可能であるが、先述した通り桑原が父に届いた西洋の絵葉書を自らのものとして絵葉書帳にまとめていたことや、敦賀の料理店で西洋心酔の素地を培ったように、西洋への憧れは文学の読書を梃子に桑原の中に徐々に重層性を帯びてきたことが確認できるのである[31]。

3－2　回覧雑誌『近衛』とグループ活動

かくて桑原は友人との交流を深め、中学2年の終りにさしかかり島本融の提唱で回覧雑誌『近衛』の創刊に加わることになる。1919年1月25日[32]に京都一中のある町名から誌名をとって『近衛』は刊行された[33]。島本融が編集長で発刊の辞を起草し、桑原が副主幹格で、貝塚や難波、堀江保蔵（後に京都大学教授）ら同級生20人ばかりで毎月発行することになる（6巻大304頁、8巻思135頁)[34]。この『近衛』という回覧雑誌が京都一中の桑原の友人たちを結集させ、盛んなグループ活動につながっていく。

『近衛』には「クラス中にはなおマルクスとマルサスとを混同して恥じざる者あるは遺憾なり」という島本の文面も記され、これは桑原に向けられた言葉であったようである（4巻209、469頁、6巻大307頁)。桑原自身は島本や貝塚も形容するようにユーモア作家として筆を揮い[35]、マンガ、ユーモア小説、おとぎ話、社会時評、社会調査の類を寄稿した（6巻大307頁、8巻思135頁)。その中で桑原は『近衛』第3号（1919年）には「夜店のおつさん等」を発表し、夜店のおっさんの人間類型を分析し、巧みな話術で違った商品を客に買わせてしまう香具師の姿をユーモラスに描写している[36]。ここにすでに桑原が後に得意とした人間素描（ポルトレ）の観察眼と、現実に根ざした社会批評を行うプラグマティストとしての傾向を見出すことも可能である。

桑原がユーモア作家と目されていたのは、堺利彦が貝塚渋六名で書いた諷刺ユーモア小説を愛読していたことも影響があったであろう（6巻大307頁)。また彼は政治家の三木武吉の「巧妙無比な弥次」をひいきにして、そのほか中学時代に石川三四郎、鈴木文治、大杉栄、山崎今朝弥、河上肇『貧乏物語』も読んでいた（4巻541頁、6巻大310頁、1巻跋636、641頁)。一方、周囲が愛読していた阿部次郎や倉田百三は「哲学教養的文化主義に何となく反発」して読まなかった（6巻大310～311頁、10巻246～247頁)。

『近衛』を創刊した直後、1919年2月15日、京都友愛会主催の普選要求労働者大会が岡崎の市公会堂で開催され、「五千の市民がおしかけた」という[37]。会場は超満員で、桑原も参加しており、窓わくにつかまったまま尾崎行雄の雄弁に魅了されたことを述懐している（6巻大307～308頁、1巻跋636頁)。

彼は当時の時勢と社会認識について『大阪朝日新聞』をはじめジャーナリズムの影響を素直に受けていたと述べている。『大阪朝日新聞』が白虹事件で弾圧された後に刊行された『大正日日新聞』は中学時代の桑原が愛読した新聞であり毎朝楽しみにしていた[38]。『近衛』に集った友人たちは桑原含め、農村的な政友会より、都市的なブルジョワ性の強い憲政会が好みであったという。1920年に森戸辰男の筆禍事件が生じると、『近衛』では森戸を声援し、「赤」という言葉に対しても「赤が悪ければ、日章旗も赤でないか」と書く者もいたようだ（6巻大306、309～310頁、1巻跋636頁)。『近衛』はそののち2学年下の川崎近太郎、多田政忠、湯川（当時は小川姓）秀樹、新村猛（後に名古屋大学教授）らを加えて、桑原たちの代が

中学４年となる1921年に総計して約20冊を刊行して活動を終えた（６巻大305頁）[39]。

他方、桑原はこの『近衛』の友人たちで数多くのグループ旅行をしている。1919年３月の高野山と和歌山への１泊グループ旅行を皮切りに、同年５月に同級生13人での日帰りの奈良見学旅行、同年７月に同級生７人と富士登山をして甲府、諏訪を経て５泊の旅行、1920年の春休みに同級生７人と吉野方面にグループ旅行を行った。奈良見学と富士登山の間の時期かもしれないが、桑原の企画で長篠の古戦場見物にも行っている（３巻218頁、４巻210頁、６巻555頁、８巻思107～113頁、10巻375頁）。

桑原によると、大正期には観光という言葉はなく、名所見物も盛んとはいえない中で、日帰りの奈良見学は先駆性をもつものだったようだ。この奈良行きは島本が『近衛』に日本古代建築論を書いたことをきっかけとしており、雑誌連載時に目を通していた者がいたかはわからないが、和辻哲郎『古寺巡礼』が岩波書店から刊行される1919年５月と同時期である。西大寺で案内を頼んだ僧侶から和辻哲郎批判に桑原が接したのもこの奈良見学においてであった（６巻大314頁）。その他にもグループで展覧会、演説会、民営の運動会などを行っている[40]。

３－３　休学の濫読からフランス文学への転進

このように友人と回覧雑誌や、戸外でのグループ旅行を精力的にこなしていた桑原であったが、肺尖カタルにかかり1920年４月から１年間休学する転機を迎える。1918年の夏の３里半の遠泳試験では２番の成績であったのに、翌1919年８月の５里遠泳試験ではびりから２番の結果で、船に収容されてから裸体のまま意識を失ってしまう。その頃から病菌が体内に宿っていたようだ（８巻思139頁）。

1920年春、中学３年の吉野方面の旅行で強行軍もたたり、中学４年生になる同年４月の始業式当日に発熱し、肺尖カタルの診断が下り、京都一中を１年間休学することになった（８巻思139頁）。これによって桑原は濫読に耽り、最終的にはフランス文学を学ぶ進路を選ぶようになる。

休学当初は友人たちも見舞いの傍ら本を持参してくれたが、中学４年での受験を控え見舞いの頻度も限られてくる。桑原にとって１日１冊は不可欠であるが、本を買うにしても父から月２～３冊と決められていた。そこで読むものに窮して父の書架を物色することになる（８巻思140～141頁）。

その時に読んだものが内藤湖南『支那論』、重野成斎・久米邦武らの『国史眼』、箕作元八『世界史講話』である。また隠蔵は寄贈雑誌を保存しており、『太陽』『新日本』『中外』『学生』『中央公論』のバックナンバーに桑原は目をつけ、興味のありそうな創作や論文にも目を通していった（８巻思142～143頁、１巻跋635頁）。病床では、『太陽』の連載のものと思われるが、南方熊楠「十二支考」も愛読したという（３巻452頁）。

やがて病気も快方に向かい自由に外出できるようになると、一番先に足が向かったのは本屋である。桑原は岩波書店の特約店になっていた熊野神社そばの丸太町通にある西川誠光堂によく通い、本棚を眺めては何か１冊買って帰る生活をすごしていた。桑原が「当時京都の読書人にとって忘れることのできない西川誠光堂」と表現したように、同店は学生らから愛された本屋であった（８巻思143～144頁）[41]。桑原が休学中の1920年10月23日には京都一中で創立50年記念式が挙行され、「日本で最大多数の博士を出した中学」と謳われ、彼も機会あるごとにその文句を聞かされたと記している（４巻545頁）。この記念式の翌日には父隠蔵も京都一中（彼の卒業時は京都府尋常中学校）の卒業生として記念講演大会で講演を行っている[42]。

年が明けて1921年１月に読んだ本を桑原は次のように「『三四郎』『それから』『門』、『地上』（島

田清次郎)、『親和力』(ゲーテ)、『太閤記』、『何処へ行く』(シェンキーヴィッチ)、『わが袖の記』(樗牛)、『日本印象記』(ピエール・ロチ)、『たけくらべ』(一葉)、『水滸伝』、『吾輩は猫である』(再読)、『西遊記』。そのほか『お艶殺し』『人魚の嘆き』をはじめ谷崎潤一郎の作品が数点」と列挙している(8巻思144～145頁)。

そして前述のごとく永井荷風、谷崎潤一郎を経て、その頃に読んだエドモン・ロスタン『シラノ・ド・ベルジュラック』(楠山正雄訳)に魅力を感じてフランスのことをやろうと進路を決める(3巻218頁、8巻思145頁)[43]。

休学期間が終わり、1921年4月になって2回目の4年生となった桑原だが、そのクラスは「地味な勉強家が多く、やんちゃな秀才が少なく、私はなじまなかった」として、中学4年修了で高等学校へ進学した仲間や、5年級に残っている貝塚茂樹らと交流を続けた(8巻思180頁)。夏休みには友人に誘われて天橋立に今西錦司の一家らと海水浴を楽しんでいる。京都一中では毎学期ごとに成績順位が掲示されており、2年上のクラスでいつも2番であった今西錦司の名は桑原の中で一層印象的になっていた(7巻193～195頁、8巻思180頁)。この海水浴で今西も桑原と顔なじみになったようである。付言すると当時桑原の3年下には大塚久雄(10巻439頁)、4年下には松田道雄が京都一中に在学していた[44]。

そして桑原は病気で入院中の父に内緒でフランス語を第一外国語とする三高の文科丙類に願書を出す(8巻思145頁)。父は少し不満そうであったが、「東洋学はフランスがいいと言うじゃありませんか」と取り繕った(1巻跋626頁)。大正デモクラシーの中で、「民本主義左派ともいうべき気分」をもちながらも、永井荷風にかぶれて早くお茶屋遊びがしたいと思ったり、久米正雄『受験生の手記』に「異常に興奮」したりする中学生でもあった(6巻大309頁)。

三高の受験では貝塚は700点中、617点の首席で入学。桑原も数学は満点で、570点で6番の成績で京都一中を4年修了し、貝塚とともに三高の文科丙類に進学する(詩人13頁、1巻跋626頁)。かくして桑原のフランス文学研究者の道のりが定まるのである。

おわりに

以上、本稿では、桑原が1904年5月10日に生まれてから京都一中を4年修了する1922年3月までの約18年に渡る彼の思想形成を追ってきた。結論として本論で明らかにしたことをまとめておく。

桑原は京都育ちながら、その誇りは敦賀にあった。それは打它家に顕著なように、桑原家・打它家ともに没落過程にあったとはいえ、町の有力な歴史ある家柄に生まれたことが大きい。この前提の上で、京都一中までの桑原の思想形成を俯瞰して見えるのは、友人との深いつきあいも始まり出すとはいえ、全体的には蔵書を含めて父隲蔵の存在と影響が抜きん出ていることである。

母しんからの影響もかなり大きいと思われるが、それは文献面からあまり明らかにできないため、隲蔵に焦点を絞る。家族親類の中で桑原家を支え出世頭でもあった父隲蔵のおかげで、その長男である武夫は常に周囲から寵愛を受ける存在に位置することができた。それは打它家の大邸宅を想起すればわかるように、その広壮な敷地において中心的なポジションで育ってきた者からすれば、どこの家庭へ行ってもそう驚くことはないであろうし、桑原の自己肯定感を有する上で大きかったと考えられる。

そして武夫が就寝前に接した『通俗三国志』のお話や「合戦ごっこ」で得た雑学知識や好奇心は隲蔵の薫陶によるものであり、小学校の入学前に育んだ素養は、錦林小学校での勉学に十分すぎるほどの知的先行投資になった。食卓などでも父か

ら武夫は情報を受取ってきたのは前述の通りである。

次に桑原が強調するようにおじたちの存在は際立っている。子細に見ると、父隲蔵を除けば、桑原と打它のおじはともに社会的出世に無縁な者が多かったにもかかわらず、母方の叔父は印象が薄く、桑原は父方のおじに対する評価の方が高いように思われる。それはどのような生き方であれ楽観的で明るくあることを評価する桑原の価値観が色濃く反映されているのではないか。さらにいうと楽観性は尊重するにせよ、様々なおじたちの生き方を体感してきたからこそ、誰よりも桑原は父の堅実さに学び、専門こそ違えど後に2世の学者としてそれを具現化したともいえる。

また大勢のおじにもまれ、かれらから可愛がられたことは、桑原が男子校の小学校で友人や、担任教員とコミュニケーションをなす上でも円滑に作用したに違いない。逆におじと比べて、伯母叔母の叙述が皆無に近いのは印象的である。それはともかく、やんちゃで大胆な性格からクラスで人気者になるのは、中学でも一緒で、『近衛』に発揮されるユーモア作家の淵源でもあったろう。彼は読書家であり戸外派であったので、話題豊かでエネルギッシュな子どもであったと推測できる。

桑原の幼年期からの読書生活も順調に進展していたことは明瞭である。絵本から読書、少年雑誌から総合雑誌、冒険小説の類から「高級文学」、『通俗三国志』から父の書架の歴史書へと手に取る書物の質に深化が見られるからだ。同時に日露戦争が起きた年に生まれた桑原の思想形成では、絵本の忠君愛国思想、「海軍びいき」、兵隊ごっこ、大正天皇の即位の礼、明治の学者への敬意といった事象に見られるように軽重の差はあれど1956年に彼が「明治の再評価」を打ち出す通奏低音も認めることができる[45]。

京都一中では、静思館と回覧雑誌『近衛』の活動による友人同士の切磋琢磨が目を引く点である。これは桑原が後に京大人文研の共同研究を展開していくことを考えるならば、最初の学際的な場との邂逅といっていい。特に桑原の友人関係を紐解けば、秀才が集う京都一中の中でもさらに選び抜かれた友人たちとつきあっていたことがわかる。生徒の自主性に任された京都一中の図書館である静思館を一つの出会いの場として似た者同士が交流を求めあった結果ともいえる。小学校とは異なり、友人と外泊してグループ旅行を幾度も行ったことは、自由を満喫して友情を深めるにはまたとない機会であっただろう。

桑原が中学で休学していた時に多読するようになった総合雑誌の意味も重視されるべきである。誌名を連ねただけで、個々の雑誌から何を読んだのか詳細はわからないものの、彼は小学生の時に少年雑誌に投書し、中学では『大阪朝日新聞』『大正日日新聞』を愛読し、『近衛』の編集にも携わった。桑原が後にジャーナリズムに果敢に表出していくように、こうした体験の有無が成人になってからのジャーナリズムの関わり方に大きく影響すると考えるからだ。

その上で、桑原が京都一中に在学していた時期は「旧一中の黄金時代」と見なされるが、以下の指摘も踏まえる必要がある[46]。

> その部分的に成し遂げられた「教育天国」も、それが未来の社会的地位を約束された誇り高きエリートたちだけのものであり、そこへ割りこめなかった他の圧倒的多数の若者達の、犠牲の上に成り立っていたことを忘れて、黄金時代と讃称し、現在のあり方を、いちがいに低く評価することはできないであろう。

これに正面から応答することは難しいが、『近衛』の活動で桑原がユーモア作家と称されていたことに注目したい。桑原は少年雑誌の投書では冠づけや笑話を得意とし、夜店にひかれ、添田啞蟬坊の

歌を口ずさみ、即興笑劇のにわかを好んでいた。また堺利彦や山崎今朝弥のユーモア作品に学び、三木武吉の「弥次」のファンであった。そこには単なるエリートにとどまらない彼の人間認識の方向性が存するように思うのである。でなければ桑原が後に発表する『文学入門』や『一日一言』などの著作が大勢の読者に受け入れられた意味を見落としてしまうことになる。

ユーモアというのは個性をとらえる方法であり、創造性をはらむものである。意外性から生まれるオリジナリティといってもいい。桑原が文学に進んだのも、人間をよりよく知ろうとしたからであり、幼い頃からユーモアの資質をもっていたことは、多様な個性を包容する柔軟さを身につける道を用意したと考える。本稿では詳述できなかったが、中学時代に夭折した「不幸な友人」からも桑原は信頼を寄せられ、かれらとの交際に少なからず影響を受けている。『幸福論』でも知られるアランを後に紹介するように、今後桑原のもつ「幸福への意志」（作田啓一、6巻月報）は検討しなければなるまい。

いずれにせよ京都一中時代までの桑原は、貝塚茂樹、島本融、難波捷吾らの友人、『通俗三国志』、永井荷風、谷崎潤一郎などの作品には会っているが、さらなる生涯の友人（三好達治、吉村正一郎、西堀栄三郎、丸山薫、生島遼一、吉川幸次郎、進藤誠一）や恩師（河野与一、落合太郎）、山岳部（今西錦司との出会いはあったが友情を築くのは三高以降である）、アランやルソーらの研究対象の多く（おそらくスタンダールも）とは出会っていないことがわかる。

しかしながら、彼のパーソナリティや、フランス語の選択に至るまですでに桑原の活動の萌芽の多くが見出されるのもこの時期なのである。桑原は、阿部次郎や倉田百三には傾倒せず、自己に悩んで突きつめて考えていくタイプではないので一点を掘り下げる方向に進まなかった。何にでも興味をもつ拡散型ないし総合性の強い志向といってもいい。それは専門研究者よりも知的コーディネーターに手腕を発揮する知識人（桑原の言葉でいえば「文章を書く人」たる「エクリヴァン」、1巻跋623～624頁）として生きていく資質が垣間見られるということである。

今後の課題は当然ながら桑原の次なる進路であった三高、京大時代の思想形成に進むことである。その過程で桑原の一次史料を発掘することが重要である。桑原によると、彼は少なくとも1916年から日記をつけており（8巻思60頁）、中学初年級（1917年から1918年頃か）までは綿密に日記を記し、1923年までは1年に数日の記載はあるという（1巻跋625頁）。また断続的ではあるが1932年頃までも日記はつけたことがあり、それ以降は日記を書いていないと記している（詩人2、16頁）。三高3年の際の『応援団日誌』の半分以上は桑原が書いたものであるというし（1巻跋632頁）、東北帝国大学時代の手帳（10巻跋478頁）や武夫の妻桑原田鶴の日記（詩人78頁）への言及があり、書簡を含め可能であればこうした史料に接する必要がある[47]。

本稿では京都の竹苞楼や西川誠光堂といった書店、敦賀の西洋料理店磯貝、新京極の映画館、ミルクホールなどに言及した[48]。一つ一つは微細な存在かもしれぬが、それは同時代の文化史を構成する確かな場でもある。この桑原武夫研究が、「戦後京都学派」研究の視座を開くだけでなく、やがて京都知識人の文化史研究へと合流できるものになることを望みたい。

なお本研究は2013年度の科学研究費補助金（研究活動スタート支援）による成果の一部である。

[註]

（1）ただし桑原武夫の7回忌の集まりは、杉本秀太

郎〔編〕『桑原武夫――その文学と未来構想』(淡交社、1996年) にまとめられている。

(2) この点、2012年から慶應義塾大学出版会のウェブで連載中の菊地暁「人文研探検―新京都学派の履歴書(プロフィール)―」は桑原武夫を含めて研究に取りかかっており、著書としての刊行が待たれるところである。鶴見太郎『座談の思想』(新潮選書、2013年) でも「優れた座談のかたち――桑原武夫の力量」として桑原に言及がある。また桑原武夫の弟子であった多田道太郎 (1924～2007年) を研究した根津朝彦「多田道太郎の思想形成――戦後思想の萌芽」(『社会科学』第42巻第1号、同志社大学人文科学研究所、2012年)、同「多田道太郎における非・反アカデミズムの視座」(『社会科学』第42巻第4号、同志社大学人文科学研究所、2013年) は桑原武夫と「戦後京都学派」の研究を射程に入れたものである。

(3) ほか『桑原武夫集』の続編ともいえる桑原武夫『昔の人今の状況』(岩波書店、1983年)、同『日本文化の活性化』(岩波書店、1988年) と、桑原の4冊の対談集『日本の眼外国の眼』(中央公論社、1972年)、『中国とつきあう法』(潮出版社、1978年、加藤周一との共著)、『人間史観』(潮出版社、1983年)、『日本語考』(潮出版社、1984年) は主要文献である。同『増補新版　詩人の手紙　三好達治の友情』(筑摩書房、1982年、初出1965年) も桑原の思想形成に関する貴重なデータを含んでいる。

それから『桑原武夫記念室所蔵図書目録』(京都市国際交流協会、1992年) には桑原が所蔵した全集、単行本、大型図書、文庫・新書・叢書、和漢籍、洋書、逐次刊行物が記されている。目録の利用で便宜をはかっていただいた荒木泰子氏、溝口智子氏に記して謝意を表したい。なお本稿脱稿後に一般書ではあるが、柴山哲也『新京都学派』(平凡社新書、2014年) が刊行された。同書では触れていないようだが、「新京都学派」という呼称は少なくとも『朝日新聞』1959年8月30日付日曜版「新京都学派」上と同紙同年9月6日付日曜版「新京都学派」下の記事まで遡れる。2010年3月7日の西村勇氏 (元朝日新聞社学芸部長) への聞書きによると、この記事は同氏が書いたものという。

また著作集に未収録の文献名は『桑原武夫集』10巻に掲げられている。『桑原武夫集』には各巻末に桑原による「自跋」があり、それが自伝的描写となっている。『桑原武夫集』全10巻は基本的には執筆順に収められており、1巻のみが「西田先生の一面」を除き戦前戦中に発表されたもので、2巻以降は全て戦後の著作である。それから以下、本稿では煩雑なため『桑原武夫集』からの引用・言及は (×巻×頁) のように表記し、『増補新版　詩人の手紙』からの引用・言及は (詩人×頁) と表記する。なお引用・言及の多い「大正五十年」(6巻所収) と「思い出すこと忘れえぬ人」(8巻所収) ならびに晩年の回想である「自跋」(各巻末所収) は、区別しやすいよう (6巻大×頁)、(8巻思×頁)、(×巻跋×頁) と記すことにする。

(4) 吉川幸次郎〔編〕『東洋学の創始者たち』(講談社、1976年) 所収の桑原武夫が参加している座談会「桑原隲蔵」も参考になる。桑原隲蔵の学問に関しては吉澤誠一郎「東洋史学の形成と中国――桑原隲蔵の場合」(岸本美緒〔編〕『東洋学の磁場　岩波講座「帝国」日本の学知　第3巻』岩波書店、2006年) を参照。

(5) 本稿の執筆に先立ち、2012年10月18日には桑原武夫のご子息である桑原文吉氏に面会して敦賀の関係者をご紹介いただいた。同年11月12日には敦賀で田代章子、打它明子、田代牧夫、益田弦の各氏に大変お世話になった。記して謝意を表したい。

(6) 田中田鶴の父親田中栞は1942年11月の時点で大阪株式取引所理事を務めている (山本元〔編〕『敦賀郡古文書』桑原武夫、1943年、後がき)。

(7) 『敦賀市史　通史編』下巻 (敦賀市、1988年) 19頁によると、桑原久兵衛は1874年の時点で御手洗町の副戸長を務めている。

(8) 同上、201頁。

(9) 桑原武夫「私のうけた家庭教育」(『人間粗描』中央公論社、1950年、初出『女性生活』1942年1月号) 66、68～69頁。

(10) 「桑原隲蔵略年譜」(『桑原隲蔵全集』第5巻、岩波書店、1968年) 542頁。

(11) 同上「桑原隲蔵略年譜」で妹の名前と出生年月がわかり、桑原瑞枝は1930年9月に小松周治と結婚という記載もある。『桑原隲蔵全集』第5巻の目次前の写真には隲蔵、しん、武夫、瑞枝の家族写真がある。他にも別の家族写真は、桑原武夫『思い出すこと忘れえぬ人』(文藝春秋、1971年)の目次前にあり、叔父の田代勘三郎の写真なども掲げられている。

(12) 佐々木康之「人間理解の出発点」(桑原武夫『思い出すこと忘れえぬ人』講談社文芸文庫、1990年)219頁。

(13) 敦賀郡役所〔編〕『敦賀郡誌』(臨川書店、1985年、初出1915年)775頁には「鳥子紙は敦賀の名産たり、明治二十年頃迄は製造戸数二戸ありしが、其後は一戸となる。京都西陣機場を唯一の顧客とせり。時の進運は他地方にて機械を用ひて製する者を生じ、之と競争する能はずして三十八年遂に業を廃す」とあるので、1905年に製紙業の鳥の子屋を廃したのかもしれない。

(14) 石井左近「桑原隲蔵」(青少年育成福井県民会議〔編〕『若越山脈　第1集』福井県企画開発部青少年課、1970年)173頁。

(15) 桑原、前掲「私のうけた家庭教育」67頁。

(16) 同上。三高から桑原の親友になる吉村正一郎は、中学3年の頃に、桑原隲蔵が書いた東洋史の教科書で習い、この教科書で紹介されていた人物の面白い逸話を印象深く回想しているように、隲蔵は息子の武夫に対しても歴史上の群像のエピソードを色々語って聞かせたのではないだろうか(吉村正一郎「父と子」梅棹忠夫・司馬遼太郎〔編〕『桑原武夫傳習録』潮出版社、1981年、317頁)。

(17)『通俗三国志』は武夫の祖父久兵衛も(1巻519頁)、叔父の勘三郎も親しんでいたようで、桑原にいわせると叔父にとってはこの『通俗三国志』が「唯一の教養書」であったらしい(8巻思73頁)。

(18) 桑原、前掲『日本文化の活性化』220頁。

(19) 吉川編、前掲『東洋学の創始者たち』232頁で桑原武夫は父隲蔵から「ランケはえらいんだということを私子供のころに聞かされて、深く印象づけられました」と述べている。

(20) 岡崎に府立図書館が移されたのは1909年である(京都市〔編〕『京都の歴史8　古都の近代』学芸書林、1975年、276頁)。

(21) 貝塚茂樹『わが歳月』(中央公論社、1983年)43頁。

(22)『錦林校百年史』(錦林小学校百周年記念事業委員会、1969年)51頁には、大正時代の頃は「名門一中の入学率高く入学者の約3分の1は本校で占めた」とある。ただし後述するように桑原の入学した1917年は京都一中への入学許可者138人のうち、錦林小学校の出身者は16人だったようである。

(23) 桑原は中学へ入って父の書架から前出の山本元〔編〕『敦賀郡誌』(1915年)などを読み、敦賀に誇りをもつようになった。『敦賀郡誌』には打它家や打它宗貞らのことが書かれており、同書1029頁(臨川書店版)には大谷吉継の敦賀城表門を譲り受けた打它弁次郎宅の表門の写真も掲げられており、桑原が誇りを抱くのもよく理解できる(同書は敦賀郡役所編纂によるが、実際の編纂者は山本である)。桑原が1943年に初の評論集『事実と創作』を出すと、その印税で前出の『敦賀郡古文書』を300部自費出版したのも敦賀への愛着からであった(9巻504頁)。

(24) 前掲『敦賀市史　通史編』下巻133頁には「敦賀には一軒もなかった西洋料理店が晴明町に開業したのは明治二十一年であった。神戸においてフランス・イギリスを始め、各国の料理法を身につけてきた伊呂波楼の主人が、敦賀に帰ってから始めたもの」とあるが、これが磯貝かどうかはわからない。

(25) 吉川編、前掲『東洋学の創始者たち』234頁で桑原は「映画がはやりだしたのは、私の小学校一年生くらい」と語っている。

(26)『京一中洛北高校百年史』(京一中100周年洛北高校20周年記念事業委員会、1972年)213頁。

(27) 貝塚茂樹「わが友の書」(梅棹・司馬編、前掲『桑原武夫傳習録』)84頁。

(28) 貝塚、前掲『わが歳月』43頁。京都一中時代の桑原の友人の記録は島本融らいくつか存在するが、『在りし日の木村泰雄』(木村千恵子、1976年)も

ある。

(29) 島本禮一・富田朝彦〔編〕『島本融　その追憶』(島本初音、1977年) 62頁。同編『島本融　その足跡』(島本初音、1977年) の目次前の写真には具体的な日付は不明だが、島本融を含め静思館の委員24人と、教員と思われる2人が写っている。下村寅太郎『わが書架』(北洋社、1979年) 31頁によると静思館は「二年から五年級までの各クラスから二名ずつ委員が出て、一週一回勤務する」とあるので、各学年3クラスとすれば24人という数で一致する。静思館の委員が2年生からとすれば、桑原の入学早々委員にされたという言及は2年生のことを指すのかもしれない。なお『わが書架』の巻末には当時京都一中で配布された学校の編纂による「読書之栞」が収められている。また『わが書架』も引かれているが、当時の教養主義の状況を概観したものとして竹田篤司『明治人の教養』(文春新書、2002年) がある。

(30) 貝塚、前掲『わが歳月』45頁。

(31) 内藤戊申「桑原先生の憶いでその他」(前掲『桑原隲蔵全集』第5巻月報) や三田村泰助「桑原先生の学風」(『桑原隲蔵全集』第3巻月報、岩波書店、1968年) によると、桑原隲蔵の講義では欧文文献も多く板書され、彼の蔵書には大量の洋書があった。欧文文献にも通暁した父の存在は、武夫にとって西洋社会への距離を身近なものにしたはずである。

(32) 島本・富田編、前掲『島本融　その足跡』36～37頁。同頁に『近衛』創刊号の目次が掲げられている。

(33) 島本融「五十年の交友から」(梅棹・司馬編、前掲『桑原武夫傳習録』) 162頁。

(34) 難波捷吾が副編集長という記述もある (桑原武夫『人間素描』文藝春秋新社、1965年、244頁)。

(35) 島本、前掲「五十年の交友から」162頁、貝塚、前掲「わが友の書」85～86頁。

(36) 『桑原武夫全集』第4巻 (朝日新聞社、1968年) には桑原が『近衛』に寄稿した「大石良雄につきて」(1920年1月28日)、童話「水晶の靴」(1921年3月9日)、「中学生と読書」(1921年5月17日) が収められている。「夜店のおつさん等」は、梅棹・司馬編、前掲『桑原武夫傳習録』に収められている。童話「水晶の靴」では舞台設定がフランスになっているのも興味深い。

(37) 前掲『京都の歴史8』364頁。

(38) 吉川編、前掲『東洋学の創始者たち』250頁で桑原武夫は父隲蔵が「新聞の切り抜きはたいへん熱心にやりました」と証言している。

(39) 『近衛』は回覧雑誌で各人の原稿を持ち寄って綴じて刊行されたものであり、貝塚、前掲『わが歳月』46頁によると、京都一中卒業後解散する際にくじ引きで同人に1冊ずつ分配したという。『近衛』は欠本はあるものの京都大学人文科学研究所に所蔵されている。

(40) 島本、前掲「五十年の交友から」163頁。

(41) 詳しくは松木貞夫『本屋一代記　京都西川誠光堂』(筑摩書房、1986年) を参照。例えば、西田幾多郎、佐々木惣一、菊池寛、中村直勝、近衛文麿、高倉輝、三木清、松田道雄なども西川誠光堂を利用していた。

(42) 前掲『京一中洛北高校百年史』203頁。

(43) 桑原は1922年と思われるが、後に生島遼一と共訳するスタンダール『赤と黒』を手にしている。桑原は中学時代に佐々木孝丸が訳した『赤と黒』を読み、誤訳が多く途中で投出してしまったと書いている (詩人60頁、8巻思140～141頁)。しかし、佐々木訳の『赤と黒』の翻訳が出たのは桑原の京都一中卒業後であり、桑原自らが「1922年に私は高等学校に入ったばかりであった。この反訳が出ると早速読んでみて、なるほど悪文で難解だとは思ったが、興味はひかれなかった」と書いているように、三高入学後に目にしたと考えられる (桑原武夫・鈴木昭一郎〔編〕『スタンダール研究』白水社、1986年、20頁)。栗須公正『スタンダール　近代ロマネスクの生成』(名古屋大学出版会、2007年) も参照のこと。

(44) 松田道雄「学問を楽しむ態度」(梅棹・司馬編、前掲『桑原武夫傳習録』) 287頁。他にも三雲祥之助 (後に画家) が桑原と京都一中での同窓生であった (10巻8頁)。

(45) 例えば多田道太郎のような「戦中派」が軍隊で辛酸をなめてきたのと比べると、桑原は都市社会

で育ってきた人間として思想形成の上では時勢に対する暗澹たる憂いもなく、比較的順境の時代を享受していたことに特徴がある。

(46) 前掲『京一中洛北高校百年史』165～166頁。

(47) 桑原隲蔵も1901年から亡くなる1931年まで日記をつけていたようだ（8巻思4頁）。

(48) 脇村義太郎『東西書肆街考』(岩波新書、1979年)、和田洋一・松田道雄・天野忠『洛々春秋』(三一書房、1982年)、中河督裕「梶井基次郎「檸檬」に見る大正末・モダン京都」(竹村民郎・鈴木貞美〔編〕『関西モダニズム再考』思文閣出版、2008年）なども同時代の京都の情景を描いている。